

# 分詞構文について

園 田 健 二

分詞構文 (participial construction) は分詞 (participle) を含む句で、文全体に対し副詞的な修飾をするものであり、接続詞を使えば節 (clause) に書き改めることができるものである。分詞構文については断片的には大体のことを解説した本はあっても、具体的に、細かく、現在における用法を解説したものはないようである。そこで本稿では、分詞構文がアメリカ英語の場合、1931年から1991年までの間に、置かれる位置 (文の前位、中位、後位)、形態、意味、の3つの面でどういうふうに変化したか、あるいは変化をしなかったかを扱ってみることにする。但し、generally speaking という表現などは現在では分詞構文というよりも一種の慣用句として扱われているので省略している。資料にしたのはアメリカの雑誌12冊である。

*Harper's Magazine* (July 1931)(略 HM31)

*The Atlantic Monthly* (July 1931)(" AM31)

*The New Republic* (July 29, 1931)(" NR31)

*Newsweek* (July 24, 1961)(" NW61)

*Reader's Digest* (July 1961)(International Ed.)(" RD61)

*The Atlantic Monthly* (July 1961)(" AM61)

*Newsweek* (July 27, 1981)(" NW81)

*Reader's Digest* (July 1981)(Asia Ed.)(" RD81)

*The Atlantic* (July 1981)(" AT81)<sup>(1)</sup>

*Newsweek* (July 29, 1991)(" NW91)

*Reader's Digest* (July 1991)(Asia Ed.)(" RD91)

*The Atlantic* (July 1991)(" AT91)

## 1. 分詞構文の位置

分詞構文は文の前位、中位、後位にくる。

*Hearing noise upstairs, the assailant fled.*(RD91)

*The husband, seeing his wife was angry, became frustrated.*(RD91)

I have stated so in print, *backing up my criticism with concrete examples.*(AT91)

位置について1931年から全分詞構文をまとめれば次のようになる。(F = 前位, M = 中位, E = 後位).

表1

1931

	HM	AM	NR	計(%)
F	56	79	19	154(19%)
M	32	44	21	97(12%)
E	267	238	42	547(69%)

1961

	NW	RD	AM	計(%)
F	49	128	59	236(29%)
M	17	39	39	95(12%)
E	67	180	223	470(59%)

1981

	NW	RD	AT	計(%)
F	26	63	40	129(23%)
M	16	37	24	77(13%)
E	68	157	139	364(64%)

1991

	NW	RD	AT	計(%)
F	39	122	55	216(31%)
M	14	29	41	84(12%)
E	63	194	138	395(57%)

表1からわかることは各年度を通じて分詞構文は後位がもっとも多く、ついで多いのが前位、もっとも少ないのが中位ということである。この順位は各年度一定である。後位は大体60%強を占め、前位が30%弱、中位が10%強を占めている。細かい点では後位は1991年では1931年よりも少し減っているが、前位は1991年の方が少し増えている。しかし、後位、前位、中位、の順序は時が経っても変わっていない。『現代英語学辞典』には、「... 文中の分詞構造の位置には、頭位、中間位、尾位の3種がある。そのうちもっとも多く現われるのは頭位で、つぎは尾位である。」<sup>(2)</sup>と説明しているが明らかに誤りと言うべきであろう。

## 2. 分詞構文の形態

分詞構文の形態には (1)能動態形, (2)受動態形, (3)完了分詞形, (4)過去分詞形, (5)形容詞(句)形, (6)名詞(句)形, (7)独立分詞構文, (8)接続詞+分詞形がある。(1)の能動態形という語は厳密には適当でない。能動態というのは受動態に対する語であり、自動詞は受動態にすることはできないからであり、非受動態形とでも言ったほうがより正しいであろうが、ここでは便宜的に能動態形という語を使うことにする。(4)の過去分詞形の前では *having been* あるいは *being* が省略され、(5)の形容詞(句)形、(6)の名詞(句)形ではいずれも、形容詞、名詞の前で *being* が省略されているものと考えられているものである。(8)の接続詞+分詞は分詞の意味をさらに強調するために接続詞をつけるものである。(8)までは一般的な分類であるが、ここではさらに形態的なものとして、(9)として、分詞構文の否定形を考えてみる。

### (1)能動態形

*Strolling along the harbor, Lee keeps an eye on the locals.*(NW91)

Restaurants, *responding* to official guidance, have formed a kind of nationwide clean-plate club at buffets....(AT91)

He started skipping around the room, *waving* his arm and *grinning*.(RD91)

(2)受動態形

*Being thrown* on my own resources, I have developed latent sources of entertainment which are apparently inexhaustible.(AM31)

...*being warned* by the water men to call upon God, he read on his Bible again.(AM31)

Philosophy and theology...will ultimately be given up, *being replaced* by science.(NR31)

(3)完了分詞形

*Having worked* as an agent for many athletes and celebrities over the last 25 years, I've discovered that negotiation is the art of the possible.(RD91)

*Having overlooded* paying his electric bill, my brother received another from the utility company marked FINAL NOTICE.(RD91)

(4)過去分詞形

*Confused* and *exhausted*, I called home in tears.(RD91)

Men, *concerned* with status, tend to focus on establishing independence.(RD91)

Dozens of new sewing machines nearly lay idle, *covered* with dust.(RD91)

(5)形容詞(句)形

*Curious*, I asked, "Why do your boots have a flat walking heel?"(RD91)

*Grateful* for the end of the cold war, the leaders of the seven big industrial democracies repeatedly showered M. Gorbachev with praise last week.(NW91)

The two boys hugged their father again, *thankful* that his voice seemed stronger.(RD91)

(6)名詞(句)形

*A former teacher*, Croy had spent many hours trying to help.(NW91)

*A grandnephew of Kaul*, Steve had performed since he was three.(RD91)

He hunched slightly as he walked, *a fallen king* revisiting his realm....(RD91)

(7)独立分詞構文

*Hands trembling*, I drew him on my lap.(RD91)

At age three, *her blue eyes and flaxen hair encircling her smile*, Lizzie went to live with John and Pat Wilson in New York.(RD91)

Eventually the beggar, *his patience exhausted*, responds by ripping the youth's legs off.(NW91)

The three walked and crawled through narrow, honeycomb passages, *their hard hats colliding with low-hanging stalactites, their faces becoming streaked with thick, black dust*.(RD91)

(8)接続詞+分詞形

*When asked* if he could still dunk a basketball, Manigault smiled.(RD91)

The tentative plan, *as explained* to Angel, called for removing so much of her lungs that...she would have to be permanently attached to an oxygen machine.(RD91)

The researchers have found that tissue rejoined by laser heat heals faster and better than *if stitched*.(RD91)

She'd read magazines and drink peppermint schnapps *while taking* bubble baths that went on forever.(AT91)

(9)分詞構文の否定形

*Not wanting to alarm them, he replied, "No, I just don't recognize this area."*(RD91)

This interviewer was the type who asks a question and then looks away, *not listening* to your reply.(RD91)

*If not perched* on a crag or a tree, the birds needs up to 40 feet of runway, galloping awkwardly along the ground until airspeed is reached....(RD81)

次も not と content との間に being が省略された一種の分詞構文の否定形と思われる。

*Not content to repeat tried formulas, he seeks out new ideas and devises the combination sandwich....*(RD81)

以上の分詞構文の各形態の数を年度別に数えれば、次のようになる(表2)。(なお、否定形の分詞構文は参考までであり、形態には直接関係ない。否定形を含む分詞は上の数字に算入している。)

表2

	1931					1961				
	HM	AM	NR	小計	合計	NW	RD	AM	小計	合計
能動態形	F	35	50	10	95	20	56	35	111	493
	M	19	21	5	45	11	18	18	47	
	E	199	173	25	397	55	123	159	335	
受動態形	F	1	2	0	3	0	1	0	1	6
	M	0	0	0	0	1	0	0	1	
	E	1	1	1	3	0	0	0	0	
完了分詞形	F	0	3	1	4	2	2	4	8	13
	M	1	2	2	5	0	0	1	1	
	E	0	2	2	4	0	0	0	0	
過去分詞形	F	8	7	5	20	20	37	12	69	84
	M	8	12	7	27	3	10	9	23	
	E	13	16	8	37	3	13	25	41	
形容詞(句)形	F	3	4	1	8	1	19	3	23	37
	M	1	4	2	7	1	5	3	9	
	E	10	9	3	22	4	19	13	36	
名詞(句)形	F	3	4	0	7	4	2	1	7	10
	M	0	0	0	0	0	0	0	0	
	E	2	1	0	3	0	2	1	3	
独立分詞構文	F	2	4	0	6	1	2	1	4	79
	M	1	1	1	3	0	0	4	4	
	E	39	29	2	70	4	18	14	36	
接続詞+分詞形	F	4	5	2	11	1	9	3	10	32
	M	2	4	4	10	1	6	4	11	
	E	3	7	1	11	1	5	11	17	
否定形	F	0	2	0	2	0	0	0	0	5
	M	0	0	0	0	0	0	1	1	
	E	1	1	1#	4	0	5*	2	7	

# = 独立分詞構文の中の not. \* = 5例の内1例は接続詞 + not + 分詞

分詞構文について

1981							1991						
	NW	RD	AT	小計	合計		NW	RD	AT	小計	合計		
能動態形	F	11	12	22	45	362	12	49	16	77	405		
	M	3	16	14	33		0	9	22	31			
	E	59	121	104	284		55	130	112	297			
受動態形	F	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
	M	0	0	0	0		0	0	0	0			
	E	0	0	0	0		0	1	0	1			
完了分詞形	F	2	1	3	6	7	0	3	1	4	5		
	M	0	0	0	0		0	0	1	1			
	E	1	0	0	1		0	0	0	0			
過去分詞形	F	10	30	11	51	109	13	35	20	68	132		
	M	9	16	9	34		13	15	11	39			
	E	1	11	12	24		4	13	8	25			
形容詞(句)形	F	0	8	2	10	17	4	10	9	23	39		
	M	0	2	0	2		0	1	2	3			
	E	0	3	2	5		1	7	5	13			
名詞(句)形	F	1	4	0	5	5	7	11	3	21	22		
	M	0	0	0	0		0	0	0	0			
	E	0	0	0	0		0	1	0	1			
独立分詞構文	F	0	2	1	3	26	0	2	2	4	58		
	M	0	1	1	2		1	2	2	5			
	E	2	15	14	21		0	36	13	49			
接続詞+分詞形	F	2	6	1	8	34	3	12	4	20	33		
	M	4	2	0	5		0	2	3	5			
	E	5	7	7	19		3	6	0	9			
否定形	F	0	5*	0	5	9	0	1	0	1	3		
	M	0	0	1	1		0	0	0	0			
	E	0	1	2	3		0	2	0	2			

\* =5例の内1例は接続詞, 1例は接続詞+ not +分詞

表3 分詞構文にあらわれる接続詞

	1981				1991			
	NW	RD	AT	計	NW	RD	AT	計
while	5	4	1	10	2	6	5	13
when	1	6	2	9	0	3	4	7
since	0	2	0	2	0	0	0	0
once	0	0	0	0	0	0	0	0
whenever	1	0	0	1	0	0	0	0
if	1	1	2	4	0	4	8	12
as	0	0	0	0	1	2	1	4
as if	0	0	0	0	0	2	0	2
as though	0	1	0	1	0	0	0	0
though	1	2	2	5	0	0	2	2
although	0	0	0	0	0	0	1	1

表4 分詞構文の各形態の各年度に占める割合。

○の数字は各形態の各年度における順位を示す。

	1931	1961	1981	1991
能動態形	67.29% ①	62.00% ①	64.64% ①	58.27% ①
受動態形	0.75% ⑧	0.25% ⑧	0% ⑧	0.14% ⑧
完了分詞形	1.63% ⑥	1.13% ⑦	1.25% ⑥	0.72% ⑦
過去分詞形	10.53% ②	16.52% ②	19.46% ②	18.99% ②
形容詞(句)形	4.64% ④	8.51% ③	3.04% ⑤	5.61% ④
名詞(句)形	1.25% ⑦	1.25% ⑥	0.89% ⑦	3.17% ⑥
独立分詞構文	9.90% ③	5.51% ④	4.64% ④	8.45% ③
接続詞+分詞形	4.01% ⑤	5.13% ⑤	6.07% ③	4.75% ⑤

表2, 表3, 表4, を項目別に上からみていくと次のようになろう。まず, 分詞構文では能動態形がもっとも多く, 分詞構文の形態の中では平均してほぼ63%を占め, 60年間でもあまり変化していない。能動態形の文中の位置としては後位がもっとも多く, 平均約74%を占め, 次いで前位で, 平均約18%, 中位が平均約8%を占めている。この順位も60年間不変である。受動態形については60年前から数がもっとも少なく, 1981年, 1991年では用例が全くないか, あっても極めて少なく, 現在ではほとんど使われていないものと思われる。完了分詞形も受動態形に次いで数が少なく, この60年でみる限り, あまり使われていなく, 現在でも少数あることはあるが, あまり使われていないようである。文中の位置は1931年頃には前位, 中位, 後位と大体一様に使われていたようであるが, 1961年から後をみると, 使われる時はほとんど前位になっている。過去分詞形は分詞構文では能動態形に次いで使われていて, 第2位であり, 分詞構文の形態の中では1931年から平均して約16%を占めている。しかも以前に比べて現在では用例が増加している。文中の位置をみると1931年頃には大体前位, 中位, 後位と一様に使われていたようであるが, 1961年をみると前位がもっとも多くなり, 1981年以降は一定して前位, 中位, 後位の順になっている。過去分詞形は受動態形と関係があり, being(時にはhaving been)を省略した形であるので, being(having been)+過去分詞の形で用いるよりは, ほとんどbeing(having been)を省略した形の, 過去分詞単独で使う方が好まれているということである。形容詞(句)形は分詞構文の形態の中では約6%を占めている。位置は1931年, 1961年頃までは後位がもっとも多く, 次いで前位, 中位の順であったが, 1981年頃になると前位がもっとも多くなり, 後位, 中位の順で, 文の中位にはあまりこない形態である。名詞(句)形は大体6番目が7番目に位置する形態で, 1931年の10例から1991年の22例というふうに用例はかなりある。文中の位置は1961年ころまでは前位, 後位の順であったが, 1981年ころからはほとんど前位になっている。中位の用例は1例もない。独立分詞構文は分詞構文の形態の中では大体一貫して3番目か4番目に多い形態で, 分詞構文の形態の中で平均約7%を占めている。位置は1931年から1991年まで一貫して, 後位がもっとも多く, 前位や中位にもくることはくるが用例は極めて少ない。接続詞+分詞形もかなり用例が多く, 平均して5番目くらいに多い形態である。分詞構文の中では平均して約5%を占めている。使われる接続詞は1931年以降whileがもっとも多い(表3)。その次に多いのは以前はifとかthoughとかもあったが, 現在はwhenが2番目に多い。使われている接続詞にはas, sinceも入っている

が、分詞構文の場合、*as* は様態を、*since* はほとんどの場合時を表す接続詞で、理由を表す接続詞ではない。接続詞の文中の位置については少し変遷があり、1961年頃までは前位、中位、後位で大体一様に使われていたようであるが、1981年頃になると中位の用例が少なくなっていて、後位がもっとも多くなり、1991年になると前位がもっとも多くなっている。しかし、用例は1981年が全部で34、1991年が全部で33というふうに用例はほとんど同じである。分詞構文の否定形はあるにはあるが一貫して用例は極めて少なく、位置も中位はほとんどなく、前位が後位である。

### 3. 分詞構文の意味

分詞構文は通例、(1)時、(2)原因、理由、(3)条件、(4)譲歩、(5)付帯状況の5つの意味を表すとされている。しかし実際には分詞構文ではこれらの意味のうち一体どの意味を表しているのか、にわかには断定しがたい場合が多い。実は明確にどの意味か区別しがたいような曖昧さに分詞構文の特色があるのであって、もし明確に意味を表したければ、分詞構文など使わずに、他の表現を使うであろう。従って、分詞構文を意味的に分類しようとする場合には、ある程度主観的にならざるを得ないが、一応従来の方法に従って5つに分類してみる。

#### (1)時

*Staring into the darkness...he saw nothing.*(RD91)

*Asked what she thought such prints were worth, she said \$10 to \$15.*(RD91)

*They managed to avoid trouble until the day Lizzie and Anna lied about their ages while trying to get jobs at a local store.*(RD91)

#### (2)原因、理由

*The United States being a nation of immigrants, it has long been legitimate for Americans with binational affinities to lobby for the support of particular countries....*(AT91)

*Disgusted with big-city doctors, Angel found a local physician.*(RD91)

*Wise in the ways of the world, Angel knew better than to tell this older man that she was only 17.*(RD91)

#### (3)条件

*...America would be better off developing other energy sources and cutting its reliance on imported oil.*(AT91)

*Left overnight along the deserted highway, the truck could easily be stolen.*(RD91)

*If successfully concluded, the talks would produce the nation's third largest bank.*(NW91)

#### (4)譲歩

*Educated as an engineer, Yeltzin became a communist bureaucrat....*(RD91)

*Nicknamed The Destroyer for his ability to crash on opposing defence, Hammond never played high-school or college football.*(RD91)

*...Lee's teak-paneled office...although spacious, was no more imposing than that of ... Los Angeles real estate agent.*(AT91)

## (5)付帯状況

*Slowly getting up*, he checked his limbs for injuries.(RD91)

His father, *still setting his food*, nodded without looking up.(AT91)

Hanoi releases 591 American POWs, *saying these were the only prisoners they hold*.(RD 91)

以上の分類に従って集計すれば次のようになる。

表5

1931					1961			
	HM	AM	NR	計	NW	RD	AM	計
時	20	46	11	77	15	50	21	86
原因, 理由	9	30	4	43	10	30	23	63
条件	4	3	3	10	3	9	12	24
譲歩	2	2	5	9	3	7	12	22
付帯状況	320	280	59	659	102	251	253	606

  

1981					1991			
	NW	RD	AT	計	NW	RD	AT	計
時	15	38	23	76	13	48	21	82
原因, 理由	7	28	18	53	9	29	8	46
条件	3	2	5	10	2	5	9	16
譲歩	3	12	3	18	4	6	18	28
付帯状況	82	177	154	413	88	251	178	523

表3をみれば、各年度を通じて順序が一貫しているのがわかる。分詞構文の意味でもっとも多いのは付帯状況で、これが圧倒的に多い。分詞構文の意味は大部分付帯状況であると言っているくらいである。これは60年を通じて同じである。次に多いのが時でこれも60年間同じである。第3位が原因、理由でこれも60年間一定している。もっとも少ないのが条件と譲歩で、この2つは1981年頃から譲歩の方が少し多くなっているが、まず60年間を通じて大体同じ程度であると言えよう。

以上分詞構文を位置、形態、意味の3つの側面からみてきたが、全体的にみて分詞構文は時が経ってもほとんど変化しないものであるということがわかる。文での位置の面では一貫して後位、前位、中位の順になっているし、形態面では細かい点でわずかな変化がみられるものの、能動態形がもっとも多く、次いで大体、過去分詞形、独立分詞構文、形容詞(句)形、接続詞+分詞形、名詞(句)形、の順に用例が多く、完了分詞形はあまり使われず、否定形はほとんど使われていないということがわかる。意味は圧倒的に付帯状況が多く、次いで大体、時、原因理由、譲歩、条件の順になっている。

分詞構文は上でみた通り非常に多く使われる構文であるが、話す際よりも書く際により多く使われる語法である。書く際でも純然たる論文というよりは小説などの比較的“軽い”書き物



により多く使われるようである。 *The Atlantic (Monthly)* には都合のよいことに短編小説と本格的な論文の双方が掲載されているのでその点を少し比較してみよう。 AT91 には “What Happened to Tully” (全 9 ページ) という短編小説と “Why the Gulf War Was Not in the National Interest” (全 13 ページ) という本格的な政治論文がのっているが、このうち短編小説の方にでてくる分詞構文は全部で 66 例あり、論文の方は全部で 28 例である。 ページ数が少ないのに小説の方が 2 倍多い。 また、30 年前と比較するために AM61 をみてることにする。 AM61 には “Familiar Usage in Leningrad” (全 9 ページ) という短編小説とアメリカの精神医学に関する A. Kazin と G. Williams の論文 (全 12 ページ) がある。 短編小説の方にでてくる分詞構文は全部で 55 例であり、論文の方は全部で 16 例である。 小説の方がページ数が少ないのに 3 倍以上多い。 これによって分詞構文は書き言葉でも論文のようなものにはそう多くは使われないということがわかる。

(注)

- (1) ここで資料にした *The Atlantic Monthly* のうち、1981 年以降のものは雑誌名がただ単に *The Atlantic* となっているので、略字は AT とした。
- (2) 『現代英語学辞典』(1979 年、成美堂)、Participial construction の項。

(1991 年 12 月 28 日受理)